

## MEMO



## 2 元の襲来と武士団の活躍

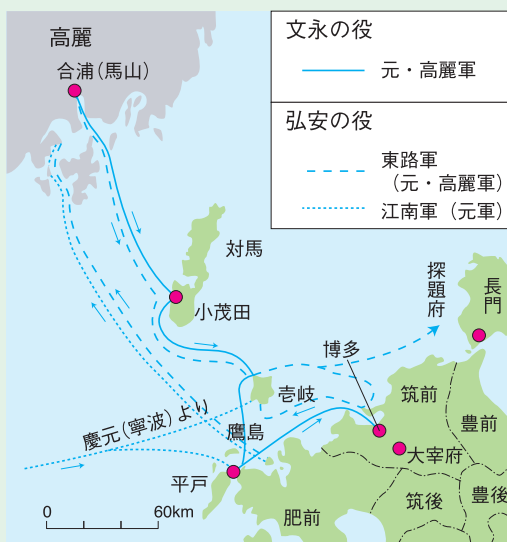
## (1) 文永の役

元と高麗の連合軍が最初にわが国に襲来したのは、1274（文永11）年11月11日の夕方で、対馬市厳原町の西岸小茂田浜であった。

守護代宗助国は、80騎の兵をひきいて立ち向かったが、4万人の元軍にたちまち打ち破られ、全滅してしまった。

元軍は、10日ほど対馬をあらしまわり、次には壱岐に押し寄せ、守護代平景隆の100騎の兵を全滅させた。さらに平戸や鷹島（松浦市）などの松浦地方沿岸を襲った。

元軍を待ち受けていた松浦党は激しく戦ったが敗れ、多くの住民が犠牲になった。松浦地方をあらした元軍は、向きを変え博多湾へ攻撃をかけた。博多では、11月25・26日、九州各地からかけつけた日本軍との間に激戦がおこなわれた。しかし、日本軍は、元軍の集団戦法や「てつはう」という火薬を使った武器のため苦戦し、後退しなければならなかった。



元軍来攻の経路

ところが、11月27日の朝には湾をうめつくしていた元の船は姿を消していた。これは暴風雨によるものともいわれたが、現在では予定の引きあげと考えられている。

## (2) 弘安の役

文永の役から7年後、元のフビライ=ハンは、再び14万の大軍を送ってきた。このときも対馬は4万人の東路軍によって最初に襲われた。1281（弘安4）年6月16日のことである。

6月21日に壱岐を襲い、6月30日に博多湾にせめ込んだが、防塁を築き待ち受けていた日本軍のため上陸することができず、鷹島や壱岐へ退いた。日本軍は、小船に乗って壱岐へ渡り、攻撃をしかけ

みんなで考えてみよう!

元の襲来で対馬や壱岐の人々はどのような被害を受けたのか調べてみよう。ホームページ巻末参照

## MEMO

た。その中には、松浦党、深堀氏、福田氏など現在の長崎県内の武士がいた。

このような戦いの中、江南軍が到着し、再び博多湾をせめようと鷹島沖に集結した。

こうして元軍がいよいよ博多湾の総攻撃を開始しようとする直前の閏7月1日の夜、大暴風が起これり、元軍のほとんどが海中に没してしまった。

### (3) 海底遺跡の発掘

主な戦場となった松浦市の鷹島には、元軍による悲劇を物語る言い伝えや史跡、遺物が数多く残っている。木でできたいかりや青銅の印かんなどは、その遺物である。



海底から引き上げられた元軍の遺物「てつはう」と「大いかり」  
(提供:松浦市教育委員会)

多くの元の軍船がしずんだ鷹島の海からは、時々漁師の網に遺物がかかることがあった。そこで、1980（昭和55）年から海底調査がおこなわれている。これまでに陶磁器、石臼など元の兵士の持ち物、石の碇、石の弾丸など、さまざまなものが引き上げられた。これらのものは埋蔵文化財センターに展示されている。

2011（平成23）年10月には、鷹島沖の海底から、元軍のものと思われる船の一部が発見された。見つかったのは、船の背骨に当たる竜骨と言われる木材や外板をはじめ、中国製陶磁器の破片、れんが、元軍が使用した「てつはう」など。元の軍船が、構造がわかる状態で発見されるのは初めてであり、当時の造船技術や元寇の全容解明につながるものと期待されている。2012（平成24）年3月には水中の遺跡としては初めて国史跡に指定された。



海底に沈む元寇の際の沈没船上から撮影した写真  
(提供:琉球大学,松浦市教育委員会)  
(撮影・編集 町村 剛)

## MEMO

鷹島埋蔵文化財センターには、数多くの貴重な元寇の遺物が保管されている。長い間海底に埋もれていた遺物は、引き揚げてそのままの状態にしておくと、腐食が進んでもろく崩れたり、さらには乾燥によって収縮や変形を起こしたりする。鷹島埋蔵文化財センターでは、これを防ぐため、脱塩や強化する保存処理などを行い、遺物の保存に万全を期している。



## 3 石鍋のなぞ

## (1) ホゲツ遺跡

西海市には、「ホゲツ」という地名がある。この地名は、穴が「ホゲツル」(空いている)からきたのではないかとされている。

ここでは、西日本一といわれる石鍋製作所の跡がある。最大規模の第6製作所跡には、両側に岩の壁が切り立っており、加工途中のソロバン玉状の岩や石鍋を削り取った跡が無数に見られる。

## (2) 石鍋のなぞ

この石鍋は滑石からできており、滑石は加工しやすく、保温効果も高い。この特徴を生かして、平安時代末から鎌倉時代にかけて滑石製の石鍋が広く使われていた。

広島県福山市の草戸千軒遺跡や、滋賀県から沖縄県にいたる西日本一帯の中世の遺跡から、西彼杵半島で製作された石鍋が出土しており、ここから各地に送り出されていたことがわかる。



石鍋製作所跡

(提供:西海市教育委員会)

西彼杵半島の山中には、50か所ほどの石鍋製作所が見つかったのだが、だれがつくったのか、また、どこから積み出されたのかなぞが多い。やがて焼物の普及もあって、石鍋は徐々に

## MEMO



加工途中の石鍋

(提供:西海市教育委員会)

使われなくなり、江戸時代になると石鍋の制作のことは忘れ去られてしまった。

1979(昭和54)年にホゲット遺跡の発掘調査がおこなわれ、県内ではめず

らしい遺跡として注目されるようになり、1981(昭和56)年には国の史跡に指定された。



## 4 ヨーロッパ文化との出会い

## (1) 西の都平戸

平戸港の北端に常灯の鼻と呼ばれるところがある。かつてここにはオランダ国旗がかかげられ、夜は灯火をつけていたという。この上に立つと、帆船が今にも入港してくるような感じがする。

平戸の領主松浦隆信は、かねてから貿易によって力を蓄えようと



寺院と教会(平戸市)

(提供:長崎県観光連盟)

※手前から瑞雲寺,光明寺,平戸ザビエル記念教会

## MEMO

し、東シナ海を舞台に活躍していた中国の商人、五峯王直を招いた。1542(天文11)年、隆信は王直に対し、平戸の中心部に土地と大きな屋敷を与えて住ませた。

1550(天文19)年、十字をえがいた帆を張った一隻の大きな帆船が平戸の港に現れた。これは、日本と交易を望むポルトガルの貿易船であった。これ以後長崎県域はヨーロッパ文化とかがわることになった。また、スペインの宣教師フランシスコ・ザビエルが平戸を訪れた。隆信はザビエルを手厚くもてなし、領内でのキリスト教の布教を許したので、教会も建てられた。

このように、隆信は外国人を大事にしたので、平戸の港には多くの中国、ポルトガルの貿易船が集まった。

## (2) 貿易船でにぎわう西の都

ポルトガル船が来航したころは、平戸の町は日本各地から集まってきた商人のほか、中国やヨーロッパ、東南アジアの人々でにぎわっていた。

貿易の中心は、16世紀の末まではポルトガルであったが、17世紀になるとオランダとイギリスが加わり、それぞれ商館を建ててきそいあった。貿易の発展にともない、港が整備されたり、商館の住宅や倉庫などが建てられたりした。

外国船が入港するたびに、京都や堺をはじめ各地から商人が訪れ、せまい平戸の町は「西の都」とも呼ばれるほどのにぎわいをみせていた。

## (3) 生活にとけこんだ

### ヨーロッパ文化

本県は、16世紀後半からの貿易によってヨーロッパ文化の影響を受けるようになった。

このころ、多くの石づくりの家や倉庫などが建てられたが、大工や石工の技術はヨーロッパ人に学んだものであり、「オランダ橋」と呼ばれる平戸市のアーチ式石橋「幸橋」はその代表的なものである。



木造オランダ船船飾り  
(松浦史料博物館(平戸市)所蔵)

MEMO



アーチ式石橋「幸橋」(平戸市)

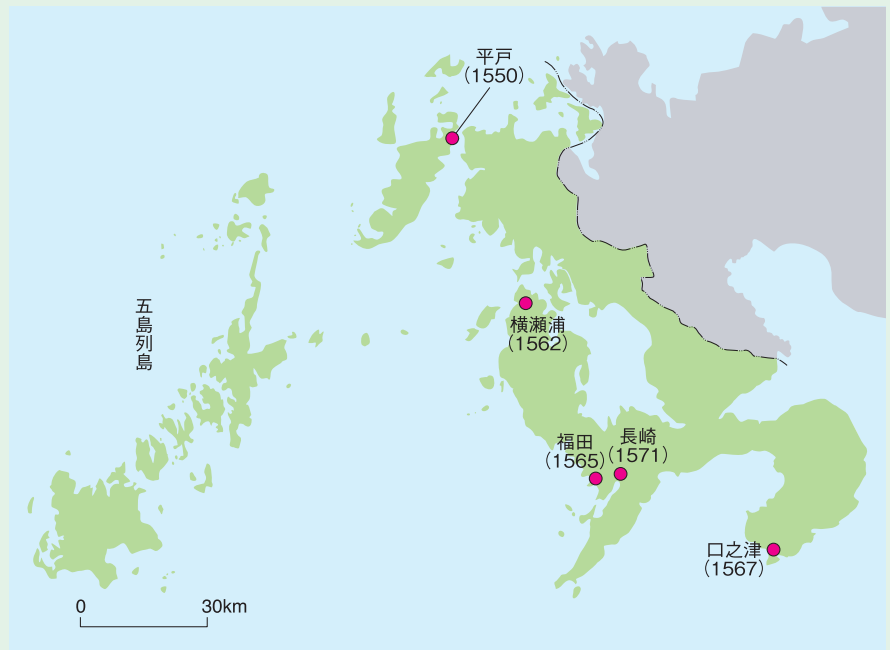
(撮影:県義務教育課)

日ごろ使っているボタンやパンなどの言葉はポルトガル語であり、ガラスやランドセルなどはもともとオランダ語である。また、カステラに代表される南蛮菓子なんばんがしの作り方も伝えられた。

(4) 平戸から横瀬浦へ

ザビエルによって伝えられたキリスト教は、平戸周辺の島々にまで広がっていった。しかし、ザビエルに布教を許した隆信は、キリスト教を信仰してはいなかった。

1561(永禄4)年ポルトガル人殺傷事件がもとで、ポルトガル人と隆信との対立が深まり、ポルトガル船は平戸に代わって大村領横瀬浦せうら(西海市西海町さいかい)に入港するようになった。



ポルトガル船の寄港地(初めて来航した年)

## MEMO



南蛮船想像図

しかし、横瀬浦での交易は、1年余りの短期間で終わり、その後、ポルトガル船は、福田（長崎市）そして長崎に移ることになった。



## 5 キリシタン文化

## (1) 島原半島とキリシタン

今から400年前の島原半島の南部では、オルガンの音が響き油絵が描かれるなど南蛮文化の花が開いた。ここでは、わが国最初の活版印刷も始まった。

島原半島を支配していた領主有馬晴信が、1580（天正8）年キリスト教の洗礼を受けてからは、有馬（南島原市北有馬町）、口之津（南島原市口之津町）を中心に信者がふえ、大村領にならぶ一大キリシタンの地となった。

全国で確認されているキリシタン墓碑の多くが、南島原市の加津佐町、北有馬町、西有家町、有家町、布津町などに残っており、当時のキリシタン文化の繁栄を物語っている。



吉利支丹墓碑（南島原市西有家町）

（提供：南島原ひまわり観光協会）

## MEMO

## (2) セミナリヨとキリシタン文化

1580(天正8)年、安土(滋賀県)とともに有馬にセミナリヨ(キリスト教の神学校)がもうけられた。ここで、若者たちはキリスト教に関する学習だけでなく、ラテン語を学び、オルガンやヴィオラをひき、油絵や銅版画も学んでいた。ラテン語の学習では、日本人が印刷した教科書が使われていた。

1582(天正10)年に派遣された天正の遣欧少年使節も、この有馬のセミナリヨの生徒の中から選ばれた。

キリスト教の弾圧が激しくなると、有馬のセミナリヨは迫害をさけて、加津佐、八良尾、有家(南島原市)、天草(熊本県)などを経て島原へと移り、1614(慶長19)年、長崎を最後に閉鎖された。



セビリアの聖母 (許可:カトリック長崎大司教区)  
1597(慶長2)年有家のセミナリヨ日本人画学生によって制作された銅版画

## (3) 日本で最初のキリシタン大名「大村純忠」

純忠は、1533(天文2)年、島原の領主有馬晴純の次男として生まれ、5歳の時に母の実家の大村家の養子になった。その後領主になったが、親類や家来がいつそむくかわからないという不安の中で、心は大きくキリストの教えに傾いていった。1563(永禄6)年に純忠は家来24名とともに横瀬浦(西海市)の教会でトロレス司祭によって洗礼を受け、日本で最初のキリシタン大名となった。

それから1571(元亀2)年には、長崎を開港してキリシタンの町をつくった。ここには全国から信者が集まり、丘には教会の十字架が輝いたという。バリヤーノ神父とともに懸命な働きをし、1582(天正10)年には、少年使節団4人をローマ教皇のもとに送り出した。

純忠が治める大村領にはキリシタンは記録によると6万人とも7万人ともいわれ、全国一のキリシタン信仰の領地となった。55歳で亡くなるまで信仰を守りぬいた大名だった。

みんなで考えてみよう!

キリシタン大名大村純忠についてくわしく調べてみよう。